

論 文

日本における一角獣の行方

吉 野 政 治

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
教授

Why the unicorn can't live in Japan?

Masaharu Yoshino

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

はじめに

百以上のドイツの都市には現在も「一角獣」という名の薬局がある。家番号がなかった頃、家々には動物の名前などが付けられたが、「一角獣」の表象には宗教的な意味と医療的な意味が籠められており、薬局は好んで用いたからだと言う(円・ド・ペーア著、和泉雅人訳『一角獣』河出書房新社1996.1刊 p.11)。一角獣が持つ宗教的な意味については後に述べるが、医療的な意味はその角に解毒作用があると信じられていたことによる。そのことは江戸時代の日本にも伝えられていた。例えばウォイト(J. Woys)のシカットカームル“Schut-Kamer”([医学宝函])は日本の江戸時代の蘭方医にも広く読まれていた書物であるが、その「主治」(薬効)は「一切中毒・驚癲・麻疹身体疼痛、專解諸熱毒」、並奏「奇功」とされ、「宜平常取蓄而備急卒業之用」とも書かれている(大槻玄沢の『六物新志』に載せる訳による)。

今日の日本でも「一角」を成分に含む薬が売られている。宮下三郎氏の「一角の輸入」(『日本洋学史の研究Ⅹ』1989.4創元社刊所収)によると、一般薬を収載した日本医薬情報センター編の『日本医薬品集一般薬』(第五版、薬業時報社1987刊)に、「一角」を含む小児鎮静剤が六つ記載されている。その大半は富山県で製造する配置売薬であり、例えば次のような薬である。

感応丸 配置薬 国民製薬(富山市) 人參、麝香、牛黄、沈香、一角、熊胆。
奇応丸 配置薬 池田義恵商店(富山県中新川郡) 麝香、牛黄、竜腦、人參、沈香、熊胆、一角。

これらは江戸時代から今日まで伝わっているものであろう。宮下氏の調査によると、享和四年(1804)から文久元年(1861)までの五十八年間に輸入されたウニコール(すなわち「一角」)はおよそ一、七トンであり、落札価格は単位あたり最高一七六〇匁、最低でも三五〇匁である。これは薬としては高額であったという。日本で「一角」がこのように珍重されたのは、幕府大目付であった井上筑後守政重が奇跡的な解毒力があると信じ込んで小判二〇〇枚分も買入れたのに始まるという(『長崎オランダ商館の日記』慶安元年(1658)五月十四日〔陽曆七月四日〕の記事)、こうした「一角」人気を配慮してか、オランダ商館長は江戸参府の時の將軍への献上物に「一角」を加えるようになる。『徳川実記』の承応二年(1653)一月十五日に將軍家綱に「一角一本」が献上されたことが記されているのがその始めのようであり、以降、同記には万治二年(1659)、寛文八年(1665)、延宝五年

〔1677〕、天和三年〔1683〕などにその記事が見られる（磯野直秀編『日本博物誌総合年表』20124平凡社刊による）。また、長崎会所の薬種目利やくしゆめりによって書かれた『舶載薬物録』（文政三年〔1820〕刊）には安永二年〔1773〕から同七年まで毎年ウニコールをオランダ船が持ち渡ってきたと記されているが（ウニコール 安永貳巳年より同七年迄不絶持渡申候）、これは一角が本格的な交易品として持ち込まれるようになったことを言っているのである。ちなみに安永四年〔1775〕に来日したツェンペリー（C. P. Thunberg）は彼が個人的に持ち込んだウニコールによって、彼の負っていた借金が返済できたばかりか、滞在中の研究費用にも当てることができたという（『江戸参府随記』東洋文庫本 D59-60）。こうした妙薬「一角」は川柳の格好の題材にもなっている。

持参金うにこふる迄のんだつら

（『誹風柳多留』五・10、明和七年〔1770〕刊）

踊子のはなし大きなうにこうる

（『誹風柳多留』十四・30、安永六年〔1777〕刊）

宮武骸骨『川柳語彙』（大正十三年〔1924〕九月刊）によれば、第一句は「瘡瘡にかかつてアバタ面になった娘、貰人がないので持参金付で嫁入させたといふ事」であり、第二句は「一角丸と称して、其原料はウニコールではない偽物が多かった」ので、ウソの代名詞になって居た」ことを意味すると言う。

その質においても程度においても差はあるものの、「一角」が妙薬として重宝されたことは日本も西洋も同じであったと言える。しかし、その角つのの持ち主である一角獣、またその一角獣に関する伝説に対する扱いは西洋と日本とは対照的である。一角獣は西洋では現在でも信仰的医薬的な表象として生き続け、詩人たちの精神に靈魂を吹き込んでいるのに対し、日本では蘭学者たちにより、その存在は妄誕の説として片づけられて以降、西洋においてさまざまに展開した一角獣伝説までも、女の誘惑に陥った物笑いの対象となる一角仙人の姿としてのみ伝わり、現在はその存在を知る人はほとんどいない。

本稿では日本で一角獣がこのような扱いがなされるようになった理由について考えてみたい。

1 江戸時代における一角関係資料の一覧

妙薬「一角」、また一角獣とその伝説がどのように日本に伝えられたかについては、和泉雅人氏に簡潔であるが、要領よく纏められたものがある（前掲ペーア著

「一角獣」の巻末にある「訳者あとがき」。以下、本節では和泉氏が紹介している資料に本稿の筆者が新たに加えた資料（※印を附す）を列挙する。和泉氏の文章は訳者の「あとがき」として纏められている性質上、資料名と一部の語について概要が記されているだけであるので、ここでは見出し得たすべての資料の本文をできるだけきり掲げることにする。

1-1 17世紀における資料

寛文三年〔1663〕に和蘭商館長が将軍家綱に献上したものに、ジョンストン（J. Johnstone）の『禽獣鳥魚図』があった。その獣部に角を持つ馬「独角獣」が載せられている（魚部の附録には後に一角の正体とされる牙を持つ魚「一角魚」が載せられている）。西洋の一角獣の姿が日本に紹介されたのはこの書を初めとすると考えられるが（注①）、この書は長く官庫に死蔵された状態で保管され、後に青木昆陽と野呂元丈がその本文の訳を試みるまで人目に触れることはなかった。

妙薬「一角」については丹波頼理『本草薬名備考』（延宝六年〔1678〕成）に「番国」（蛮国）より「ウニコウル」が来たことが簡単に述べられているのを最初とし、続いて遠藤元理『本草弁疑』（天和元年〔1681〕成）、西川如見『増補華夷通商考』（元禄八年〔1696〕刊）、岡本一抱『広益本草大成』（一名『和語本草綱目』、元禄十一年〔1696〕刊・※）と続く。『広益本草大成』には「一角ツカカ 解ツカカ二百毒」へ相伝云犀獸數千年變ニ一角。背如ニ龜甲、頭有ニ一角。○薬店以ニ白犀角ニ偽レ之、犀角無レ潤短。一角有レ潤長」（卷二十二「獸部附録新增」とあり、この頃から既に偽物の妙薬「一角」が出まわっていたようである。

『増補華夷通商考』には卷之四・阿蘭陀・土産に「ウンカウル 獸の一角ある者也。其角妙薬也」とあるとともに、卷之四・インデヤ・土産には
独角獣 此国深山の河水に毒虫多し。諸の獸敢て先に飲事なし。ウンカウル来て其角を以て河水を攪かきませて後諸獸皆之を飲むとぞ。

という一角獣伝説が紹介されている。これが日本において最初に紹介された一角獣伝説であるが、これは在華宣教師南懐仁（F. Verbiest）の『坤輿図説』（清・康熙十一年〔1672〕以降刊）の、

有レ獸名ニ独角一。能解レ毒。此地多ニ毒蛇一。蛇飲レ泉水一。水染レ毒。人獸飲レ之必死。百獸雖レ渴不ニ敢飲一。俟ニ此獸來一。以レ角攪ニ其水一。毒遂解。百獸始就レ飲。

に拠ったものであろう。『坤輿図説』巻末の「四州異獸奇物數種之像」には「独角

「獸」の図が載せられ、次の説明も見える。

重細亜州 印度国産ニ独角獸一。形大如馬。極輕快。毛色黃、頭有角、長四
五尺。其色明。作ニ飲器一。能解レ毒。角銳、能触ニ大獅獅一与レ之鬪。避ニ身樹
後一。若誤触ニ樹木一獅反噬レ之。

日本で『坤輿図説』が広く読まれるようになるのは『増補華夷通商考』より後の
ことなのであるが(注②)、一部の日本人にはこの頃既にこのような一角獸伝説
が知られていたのである(注③)。

1-2 18世紀における資料

以降は用例のみを列挙する。傍線を引いたのは一角獸伝説について記された箇所
である。

○貝原益軒『大和本草』(宝永五年 [1708] 成)

ウニカウル

蛮語ニ一角ヲウニカウルト云、是一獸ノ角ナリ。其獸ノ名シレズ。犀角ノ類
ナルベシ。蛮邦ヨリ来ル。俗ニ称スル処ノ功能ヲコ、ニ記ス。○解ニ諸毒及
酒毒一。就レ中能解ニ魚毒菌毒一。…(中略)…○右用様一度ニ、一分或二分
サメニテスリクダキ水ニスリタテ、テ用。孕婦ニハ勿レ用。諸薬ト無ニ禁忌一。
(卷十六「獸類」)

○寺島良安『和漢三才図会』(正徳二年 [1712] 刊)

(図略) 一角 巴阿多 字無加布留 共ニ蛮語也。疑、此レ称ニル犀之通天一者
乎。

△字無加布留俗用ニ一角二字一。阿蘭陀市舶偶来而為ニ官物一。尋常難レ得。其
長六七尺。周三四寸。色似ニ象牙一而微黄外面。有レ筋。晶晶如ニ竿麩一至三末
一二尺一、細尖而筋亦無レ之。微曲斜也。内有二空穴其経四分許。価最貴。
故以ニ白犀角一充レ之。其白犀角從ニ交趾一(近年是亦希也)其色白不レ潤。長
者尺余。破レ之如レ竹有ニ禾理一。外面無レ筋。見ニ其全体一則大異矣。
(卷三十八「獸類」)

○新井白石『采覧異言』(正徳三年 [1713] 成)

臥兎狼徳(又作ニ臥蘭的亜一)地最荒潤。南阻ニ歐邏巴北海一。北接ニ亞墨利加
北界一。東西不レ知ニ其所レ極也。地氣寒凍。不レ生ニ人物一。和蘭人。時逐ニ海

鯨一。到レ此而捕レ之云。(和蘭人説。鯨有ニ大小三種一。…(中略)…此方海
中有ニ一種大魚一。…(中略)…又有ニ海獸一。形如レ馬。而有ニ一角一。往往
拾ニ得其退角一。大至三七八斤一。入レ薬神験勝レ於ニ犀角一。名曰ニウニコ
ル一。方語。ウン、一也。コル、角也。(卷第一・グルウンランデヤ)

○伊藤貞丈『安齋隨筆』(天明元年〜三年 [1781-1783] 筆)

(内容はウニニコウールの名称の解説と『采覧異言』からの引用であり、略
す)

○近松門左衛門『平家女獲鳥』(享保四年 [1719] 初演)

彼唐土の独角獸といふ獸は。水上の悪毒をおのれが角にてそ、ぎ消し。国民
の命をたすくれ供獵師は恩をわきまへず。独角獸を殺して角を取。是頼朝め
に相同じ。

○楳取魚彦(1722-1782)『喪志編』(寛延二年 [1749] 自序)

(西川如見の『増補華夷通商考』からの引用であり、略す)

○『紅毛訳問答』(寛延三年 [1750] 成・※)

(本書は小倉善就(子因)の父親が、長崎の官舎に居たとき紅毛通事から聞
いたことを記したものである)

一 ウニカウルは何の角にて候哉。海獸に候哉、山獸に候哉。何国より出候哉。
ウニカウル紅毛語にはウニニコルニウスと云、一名はエンホールン、又一
名はモノセーロスともいへり。此に訳して一角と申候。此獸一角を額の真中
に生ずるによりて、此名を得しよし西書に見へ候。しかれども此獸世にまれ
にして、其形状いかなるものと、詳に知る人なきよし、紅毛人等申候。しか
るに一二の西書の説を訳して、左に書載せ仕候。

竊に按ずるに、西書にハウリウス・ヨーヒウス人の云、ウニコルニウスはそ
の状に似て灰色、頭に長毛あり鬣のごとし。腮の鬚は野牛のヒゲに似
て、額に一角を生ず。この角諸毒を解するに即妙なり。又云アルベルテウス
人の曰、この獸性強暴にして馴ちかづきがたしむ。もしこれを捕へ得れば、
彼れ忿怒にたへずして自狂死す。又云ゲスネーリウス人アルベルテウス人ア
ルリュウシウス人の三学士の説に、この獸にこの性はなほ淫欲あり、専ら
女人を愛し、また諸の香気を嗜、よりに此角を得んと欲せば、勇力の人を撰
びて仮女となし、著するに女の美服を以し、頭に塗に上等の香油を以し、或

はかれが往来の路、或はかれが居所の傍に盤遊せしむ。別に有力の者をえらむこと二人、彼が往来の路傍に垣牆をゆひめぐらし、其中隠伏せしむ。此獸かならず香氣をかぎ、己れが居処をはなれて香氣を求め、また彼女を見て喜之淫之、しばしば彼女の脚膝に触るときに、彼女いつはりて交するまねして抱之、獸すなはち睡につく。因て垣中の伏者発て獸の身に傷つけず、唯に角のみ得て後獸をはなつ。この角を得る術は古学士テーセスと云し人に、はじまると云なり。以上の諸説によるに、山獸にても有之べきか、此獸の出生の国はさだかに相知れ不申候。追考紅毛新刻の星象の図にモノセーロス（ウニカウルニウスの別名）の形状を図す。其図形、実に駒に似て額の真中に一角を生ず。其長さ獸身の三分二程も有べく相見へ申候。

○青木昆陽『昆陽漫録』（宝曆十三年〔1763〕成）

（一角獣の図が掲げられているが、略す）

阿蘭陀大沢今村源右衛門、阿蘭陀の諸書を考へて、一角の説を著し、一角獣の図をのす。その略に云く、

ハウルスヘ子トスと云ふ者の書に曰く、韃靼のガム（韃靼にて国王のことをガムと云ふ）一角獣を畜ふ。又ランフリーの都にて、象の小さ程なるをみる。形、頭平く野猪の如く、舌尖り、釣針の如く、眼は犀に似たり。パウルスコーフユスケ云く、一角獣は灰色小馬の如く、頭に髪多く覆ひ、羊の如き鬚ありて、額に長さ二コピト（今の曲尺二尺二寸余）程の一角あり。又ホノニイ（地の名）のロウニウエイキデバルマーと云ふ者の云く、一角獣二疋メッカー（アラビヤ国の府の名）ケルケ（阿蘭陀にて大家をケルケと云）の傍の既に繋きありしを見たり。大きなは三十月を経たる馬の如く、額に一角ありて、長さ三アイラ（曲尺六尺八寸余）小さは一年を経たる駒の如くにして、一角の長さ手を四束ばかり（阿蘭陀の尺二尺の積り。阿蘭陀は手指を以て尺寸の名とす）この獸の黒色にて頭は鹿の如く、頸短くかたかたへたれ、足やせて牡鹿の足の如しの蹄。さき少しわれて、羊の如く、右の毛多し。一角獣女兒を好み、香りを好む。いつの頃よりか獸の角にあらず、北海の魚の一角なりともいへり。

この説も一定ならざれば信ずべからず。敦書あらはしたる所の和蘭桜木一角獣説の如く、山獸海獸知るべからずとなす、よろしかるべし。

按ずるに、此図阿蘭陀本草（阿蘭陀にて本草をコロイトブークと云ふ）にあ

れども、山獸海獸知るべからざれば、是亦信ずべからず。（「一角」）

○後藤梨春『紅毛談』（明和二年〔1765〕刊・※）

うんかうる、一名はあた、一の紅毛語をうんといふ、角の紅毛語をかうるといふべきを略してうんかうると唱ふ、其獸犀の類にて一角あり、犀角中の上品なるものなりと、通天犀などいへるいならん、本草に載る所の兕これなり、此ものもつばら毒を解す、番人の物がたりに、沙漠の近所に川あり、其水甚毒あり、あしたごとくにうんかうる来て、角を水に入、しばらくかきたて、のち、水をのむといふ、これを見て、それより諸獸も随て水をのむ、角のかたち象牙に似て、一二尺より八九尺まであり、角の肌粽麩に似て茶褐色、末はしほなくなめらかなり、角の中にすあり、鋸をもつて挽切に甚かたく、潔白にして微渦文あり、多くは左まき、其効能総じて毒消解によし、○食だたりに、○水に溺たるに、○癰疔其ほかあしき腫物生じ、熱氣あるとき、水或は酢にてすり付、○大熱氣に、○痰に、○喉痺に、○万腫物には別てよし、○毒虫螫たるに付、○悪血古血に、○膈虫に、○霍乱に、○氣つかれたるものに、いけ花の水にてすり立て用、○産後に、但箱根草を薄茶一服ほど粉にませ用、○傷寒に、一日に三度ほど用、○河豚其ほかの毒魚に酔たるに、○瘡瘡の熱氣さめ兼たる時用、○悪しき瘡出来たるに付、○妊娠には用はず、○酒の酔に、水にてすりて用、古硯の石のいかにも堅きにて、引めを付すり用、但し一分ほとづ、用、何の薬にも指合なし、

○平沢元愷『瓊浦偶筆』（安永三年〔1774〕成）

（この資料は南懷仁の『坤輿外紀』の内容に和蘭通詞から聞いたことを並録したものである）

印第亜。（中略）其地多毒蛇。泉水染其毒。人畜飲之即死。有獸名独角（頭註。独角即ウニカウル）毎日以角攪其水。人畜鳥獸、方敢飲。（中略）

所謂独角、即蛮船所「罕載來者」。相伝。勿撈祭亞国官庫、藏「其角二隻」稱為「国宝」。其貴重如此。其似「牛之獸」。即犀類也。（卷五）

○大槻玄沢『六物新志』（天明元年〔1781〕序、同八年〔1788〕知友に頒布）

（この資料については大意を紹介することにする）

西船が舶載するウニコルニユは、日本でもウニコールと呼ばれ珍藏され、解

毒の神品とされてきたものであるが、その物とその効きめについては不明である。そこで、オランダの諸書に就いて質すに、ヨンストンの魚図にその図が載せてあり、ウォーエツ J. Woyts の書に説があるので、その訳文を示して世の惑いを啓蒙する。

ウォーエツの書には、一角はグリーンランドの海に算する鯨の異種の巨牙であり、諸書にある額間に独角のある馬形は昔の人が実際に見たものではなく、伝聞したものを漫然と模録したものである。陸産とか、一角獣という語は誤りである。また鹿角、象牙と混同してはならない。主治はすべての熱毒を解毒するので常備薬とすべきであると書いている。

レメレイ N. Lemery の本には、一角は心気を強くし、精神を益し、癩驚を治し、諸毒を解し、発汗の効果がある。ただし、世にこの一角を頭の上に載せれば能く悪気を避けるといふのは無稽の説であり、信ずるに足りない。その服用量は(中略)であり、また、ナルワル、ルロウロはアイスランドの方言、リコルネ・デ・メルルはフランス語の一角である、と書かれている。(以上が本編の大意)

また「附考」に、ウニコル ラテン語のウニコルニユから来ており、ウニは一、コルニユは角であること、ウニコルニユに四種あり、ウニコルヘリユムは、グリーンランドの海に産するが魚の牙で、真一角と訳すべきもので、これが本物であり、他の三種は偽物であること、ウニコルニユはワルという魚の牙が本物であることを述べ、最後にその説を補強するために、青木昆陽が和蘭人に一角の説を尋ねて得た答書の和蘭文の原文の音写とその漢訳を付す。なお大槻玄沢には『六物新志』の他に『一角魚図説』(天明元年[1811])一枚があり、また『蘭説弁惑』(天明八年[1788])序にも『うんこふる』『うにこふる』は『うにこりゆに』のあやまりなり」と記す。

○木村兼葭堂『一角纂考』(天明六年[1786]自序、寛政七年[1795]刊)

(本書についても内容を摘要する)

和漢および西洋の先哲の著書には、その産は海あるいは陸と言ひ、その属は魚あるいは獣あるいは蛇と言ひ、その物は牙あるいは角と言ひ、その数は二あるいは一と言ひ、その地はグリーンランドヤあるいはインドあるいはリミヤと言ふ。諸説紛々として一つも真説を得ることはない。しかし、自分はヨアン・アンデルソン Johan Andersson のグリーンランドア国「臥兎狼徳重」の地理誌を得て、その正体が海獣一角の牙であることを知った。そこで、これまで搜索

してきた古今の諸説を列挙し、漢人の諸書を駁し、西洋の謬論を弁じ、本邦の譌言を正し、その地誌の真説を示す。

(以上のように述べた後、内外の書から一角獣についての記事を引用し、巻末には「昆陽漫録」所載の一角獣図を載せ、「按勇私東斯獸譜所載」と記す)。

○荒井白蛾『牛馬問』(宝暦五年[1755]刊)

ウニコウル

或人の曰、ウニコウルの文字は、一角の字なりや。曰、ウニコウルは蛮語なれば、其文字なし。且又ウニコウルとは角といふ事にて、牛の角も鹿の角も皆うにこうるなり。今世上にて価貴くもてはやす物は、あの方にもエンホウルといふものなり。右いふごとくに、うにかうるとは、角の惣名としるべし。

1-3 19世紀における資料

○山村才助『訂正増訳采覧異言』(享和二年[1802]成・※)

昌永按ニ此物羅甸語呼テ胡泥哥尔奴ト云ヒ、和蘭呼テ噎嬰・福阿崙ト云。共ニ一角ノ義ナリ。昔時歐羅巴洲中此物ヲ得ルコト甚稀ニシテ、其真物ノ全体ヲ詳ニセズ。故ニ獸角ナリト云ヘル説アリテ此ノ如キ名ヲ命ゼシナリ。シカルニ、後世ニ至リテ、故アリテ臥兎狼徳及ビ依蘭地ノ海中ニテ多クコレヲ得テ始テ魚牙ナルヲ明セリ。其事磐水先生ノ六物新志及ビ一角纂考中ニ載スル所其詳審ヲ悉セリ。故ニ此ニ贅セズ。(卷四「臥兎狼徳」)

○中村真兵衛『舶来諸産解説七拾條』(享和三年[1803]・※)

紅毛語エーンホールン [Eenhoorn]

エーントハート訳シ、ホールントハ角ト訳ス。然レバ一角ト云フ義。

阿蘭陀曆数一千七百七拾五年(日本安永四年二当ル)開板ノエキベルト ボイト云書ニ出諸説ヲ聞ニ、唯々一角ノ獸ニシテ大サ馬ノ如ク毛短ク深黝色ナリ。額ノ正中ニ一角生ズ。長サ五掌許ノ、其形甚懼ベシ。深林ニ棲ト雖モ其性ハ水陸相半ス。水中或ハ陸地ニ居ル。其角能ク動揺シテ全身ノ力ヲ総テ其角ニ湊ル。渠レ獵者ニ驅逐セラレ、高嶽ヨリ落ト雖モ、其角ヲ以テ身ヲ支フ。因テ其痛傷ヲ受ル事無シト云ヘリ(中略)是ハ犀角ノ事ナリ。紅毛古渡リ長崎御代官所ノ官庫ニ納テ常ニ官用ニ角尖ヨリ切テ調進有リシナリ。

(下略)

なお本書には「紅毛語エーンホールピス [Eerhoom vis]」も記されており、「(ピストハ魚ト訳ス、然レバ一角魚云フ義) 羅甸語ユニコルニユス [Tricornis] 右同書ニ形状鯨魚ニ似タル。：其上鰓ニ長キ牙有テ著ク。人はヲ角ト云テ牙ト云ハズ。：即チ、ユニコルナリ。：効能 精氣ヲ益シ汗ヲ発シ諸毒ヲ解シ或ハ癩癩及ビ肢体ノ痛或ル者用テ良トス」とある。

○村瀬之熙『芸苑日涉』(文化四年 [1807]) ※

紅毛蛮互市貨物、有^二烏你鼓縷^一、此訳云^二一角^一。能解^二百毒^一、即独角獸也。金鰲退食筆記、有^二独角獸補子^一、南懷仁坤輿外記曰(以下『坤輿図説』からの引用。略す) 熙按犀之類有^二一角者^一、有^二二角者^一。一角者謂^二之兕犀^一、或謂^二独角犀^一、正似^二今一角^一矣。(注。略す) 或以為^二骨鬚犀^一。(注。略す) 未^レ知^二然否^一、曩日見^二紅毛蛮所^レ画一角図^一、乃海魚而有^レ角、前俯^二額上^一、狀頗奇異、姑記以備^二改覽^一。(卷十「独角獸」)

○『厚生新編』卷三十五・雜集(大槻玄沢・宇田川玄真訳校、文政十年 [1827]) 頃成・※

一角(ウニコルヌ・エ、ンホールン・按一角の義なり)

往昔は一箇の獸蕃其額上に長大なる独角を見るもの有りとす。其旧図を見るに形馬の如くにして頭に一角あり。是昔より記載し伝れども畢竟妄誕に属す。古来実如此獸を見る事あらず。或は四方航海の旅客等の説に亜弗利加洲中に「アペイツシンゲン」と呼べる地に右の獸あることを語り。然れども未ダ分明ならず。珍奇の支那類を収蔵する宝库並に或ル好事家の所蔵に一個の角長直にして末漸ク尖り一体軀尻を為し其長六尺より八尺許りに至り外面白毛裏面は黄を帯ふ物あり。是を一角と稱し、多く医薬に供し「ウニコルス・ヘルム」、又「マリヌム」と名づけて用る。然るに是れは素より獸角にあらず。即チ瓦兒狼徳亜の海中に棲む鯨の異種「ナルワル・又ゼーエ、ンホールン」(海一角の義)と云ふ魚の角なり。但或ル説に其魚齒なりと云(按に「ナルワル」は其地の土名旧称なり。海一角は後來の名つくる所なり。角といふは旧説即其魚牙なり)此角と稱する物の性能功力は象牙及鹿角と同一一般なり。即汗を發し神氣を強盛にし諸般の解毒劑として世人其功を稱せり。又癩症瘡癩疥癬熱身体疼痛等良効ありといふ。然れども一説には此物抜群の功力ある事なし、唯酸敗液の過多なる症を消解するの功あるのみにして其他に良効を稱すべき事

なし。

(次に「一角魚」の項があるが、略す(注④))

○喜多郵信節『筠庭雜考』(天保十四年 [1843]) 自序)

或人宋の代の人閩次平がかける獠人奇獸を牽きたる図をもてり(難波人の所蔵)その模本をみるにウニコールの獸といひ伝ふとあるは誤にてこれ所謂天祿なるべし(此獸一角あればウニコールと押あてにいへるなるべし。ウニコールは蛮書をみるに海魚なり。『坤輿外紀』にこれを独角獸といへるをおもへば紅夷も旧説は獸としたるにや)漢土人だにおもひ謬れる物なればこゝの人しらざるは理り也。

2 蘭学者たちの妙薬「一角」の正体についての探究

前節において列挙した資料(注⑤)で扱われていることは、妙薬「一角」の舶載記事やウニコールの名義などを除くと、「一角」の正体についての考察と一角獸および一角獸伝説の紹介(傍線部)である。

前者は「獸の一角ある者」(『増補華夷通商考』)とだけ言われていたものの正体を究明しようとしたものであるが、それは次のように展開している。すなわち最初は、「一角」の正体は数千年を生きた犀の角であるとも(『広益本草大成』)、「犀角ノ類ナルベシ」(『大和本草』)、「通天犀」(『通天犀』)、「和漢三才図会」『紅毛談』)なども考えられていたようである。ただし、青木昆陽のみは「山獸海獸知るべからずとなすよろしかるべし」(『昆陽漫録』)と慎重な態度をとっていた。北海に棲む鯨類のイッカク(すなわちヨンストンの『禽獸鳥魚図』に見える「一角魚」)に当たるものを「姑記以備^二改覽^一」と紹介したのは村瀬之熙の『芸苑日涉』であり、「形如^レ馬。而有^二一角^一。：藥神驗勝^レ於^二犀角^一」と紹介したのは新井白石(『采覧異言』)であった。そして、陸獸とする説を妄誕の説とし、鯨類のイッカクであるとしたのは大槻玄沢(『六物新志』)と木村兼葭堂(『一角纂考』)であった。以降この説が通説となる。

和泉氏(前掲論文)も同様に纏められているが、さらに次のように指摘しているのは重要であろう。

いづれにせよ、江戸期の一角獸表象はすべて外来の情報によって成立しているのである。最も詳細を究めている『一角纂考』でさえ、外来の情報を外来の情報によって批判しているに過ぎない。

玄沢もまた同様である。『六物新志』の「題言七則」の始めに「六物之志皆係二翻訳一。翻訳之業全成二於和蘭学一」とあり、彼らが認めた鯨類のイッカクの効能もまた中国からの知識にすぎないのである。宮下三郎氏の論文「一角の輸入」に見える次のような指摘がある。

日本では本草学は同定の学問として発達し、中国産の原動植物を中心に、近縁や類縁の動植物についての豊富な知識が蓄積された。その成果として多くの代替薬が生まれた。一角についても、犀角かどうかという議論もあり、鯨の類という説から鯨骨による偽物すら作られていた。しかし、一角固有の薬効についての論証などは、ついに一度も議論の対象にならなかった。同定以外の分類や薬効などについては、特殊な場合を除いて、中国の知識をそのまま借用していたのである。

3 一角獣伝説の日本への伝来

和泉氏は日本に伝わった「一角獣表象はおおよそ二通りの仕方を受容・育成されたといつてよいだろう」と言われている。すなわち「一つには漢訳仏典を経由した『今昔物語』の中の一角仙人であり、もう一つは南蛮渡来の書物から受容されたヨーロッパ型一角獣表象である」。

前者すなわち漢訳仏典を経由したものについては、本稿では詳しくは触れないが、紀元前二千年頃の成立の古代オリエントの叙事詩『ギルガメッシュ叙事詩』に発し、インドの『マハーバーラタ叙事詩』所収の「リシユヤシシユリンガ説話」のような聖人の墮落モチーフとなり、『大智度論』第十一巻などの漢訳仏典を経由して日本に入り、『今昔物語集』天竺編巻五「一角仙人女人を負うて山より王城に来る語」などや『太平記』巻三十七「身子声聞、一角仙人、志賀手名上人事」、金春禪鳳作『二角仙人』、歌舞伎十八番『鳴神』、『鳴神』の翻案の馬琴の『雲妙間雨夜月』などとなったものである（岩元祐『仏教説話』筑摩書房1989年刊）。

後者は前に列挙した資料中に見られるもの（傍線部）であり、解毒作用を有する角を持つ一角獣に関わる伝承が主である。それは先ず毒を中和させる力を有する角を持ち、ライオンと闘う強暴な性質を持った陸獣一角であった。『芸苑日涉』に「其鋭能触二大獅一、若悞触レ樹、角不レ能レ出、反為レ獅斃」とあった。その角のために一角獣は狩りの対象となったが、『舶来諸産解説七拾條』に「渠レ獵者ニ駆逐セラレ、高巖ヨリ落ト雖モ、其角ヲ以テ身ヲ支フ…」とあり、『紅毛訳問答』に「この獸性強暴にして馴ちかづきがたしむ。もしこれを捕へ得れば、彼れ忿怒にた

へずして自狂死す」とあったのもそのことに付随する伝説である。さらに、その捕獲方法に処女を利用する方法があった。『紅毛訳問答』にその方法が詳しく紹介されているが、『昆陽漫録』に「一角獣女兒を好み、香りを好む」とあるのもそれを伝えたものである。

4 西洋における一角獣表象の多義性

ところで、一角獣は犀の一種と考えられることが多かったが、それは中国の本草書では犀の角には解毒作用があるとされていたからである。李時珍の『本草綱目』（明・万曆三十一年1593序刊）獸部第五十一卷「犀」項（犀角）の「發明」に、

時珍曰 犀角犀之聖靈所聚、足陽明藥也。胃為二水穀之海一、飲食藥物必先受レ之。故犀角能解二一切諸毒一。（中略）抱朴子云、犀食二百草之毒及衆木之棘一、所二以能レ毒。凡虫毒之鄉有二飲食一、以二此角一攪レ之。有レ毒則生二白沫一。無レ毒則否。以レ之煮二毒藥一則無二復毒熱一也。北戸録云、凡、中二毒箭一以二犀角一刺二瘡中一立癒。

と見える。ちなみに同書（集解）には「一角犀」と呼ばれる犀が明（1368）の初めに九真曾から貢進されたことも記されている（亦曰二沙犀一止有二角一在レ頂。文理細膩斑白文明。（中略）洪武初、九真曾貢レ之。謂二之独角犀一是矣」。

また、中国には獬豸（かいち）という一角を持つ獣がいた（注⑥）。麒麟や鳳凰と同様に瑞祥を表す神獣であるが、その角で悪霊を突くとされ、鎮墓や魔除けに用いられたものである。人の正邪をも判別し、不正な者を突くとされる。

この一角犀や獬豸と西洋の一角獣との関係は明らかではない。一角犀や獬豸が西洋に伝わって西洋のユニコーンになったとも、あるいはその逆とも考えられる。ペーアの前掲書では次のように書かれている。

一角獣は一体どこで成立したかは分かっていないが、ヨーロッパへはおそらくインドの山岳と川原を越えてもたらされたのであろう。一角獣は三つの道筋を通じてやってきた。それらの道は互いにまず並行して走り、それから接触し、交叉し、一つのものとなったのである。…（中略）…一角獣の辿った第一の道はヨーロッパ古典古代、つまりギリシャとローマ人である。第二の道は聖書であり、第三の道は初期キリスト教的色彩を帯びた自然科学書である。

第一の道における一角獣は前に述べたような解毒の角を持つ一角獣である。一角獣伝説の研究書にはあまり引用されていないが、中世ヨーロッパのヘレフォードの世界図にはナイル川下流の左岸に一角獣が描かれ、「処女が一角獣の前に膝をひる

げると、一角獣は近づいてきた、その膝の上に頭をのせて横たわり、凶暴性をまったく失って警戒心がなくなるので捕獲される」という説明がある（織田武雄『古地図の世界』講談社1981.12刊。p.120）。そういった伝承にキリスト教が関わり、一角獣はキリストの象徴となり、処女は聖母マリアの象徴となり、処女に抱かれたために獵師に捕らわれてしまう一角獣はキリストの受難の象徴となるなど、一角獣伝説は多義性を持つようになった。その具体的な展開はペーアの前掲書に詳しいが、彼はそれを次のようにも纏めている（p.13）。

一角獣がその幾重にも折り重なり、矛盾に満ちた、象徴的で神秘的な意義を獲得していったのは、本質的にはキリスト教を通じてであった。一角獣は早くからイエス・キリストを表す記号であったが、同時に死と悪魔を表すものでもあった。（中略）一角獣はあらゆるものに打ち勝つ主の力を意味し、同時に人間という罪ある衣に身を包む謙虚さをも意味していた。例えば、一角獣は紋章として騎士の力と勇気を示す徴であり得たし、しかしまた同時に修道院の特性である孤独さの象徴でもあり得たのである。一角獣が処女マリアの息子を表すことから、一角獣は貞節の象徴となる。しかし馴致したい力ゆえに、一角獣はまた制御のきかない欲望をも体現し、その結果ここでもまた、古代とは異なった仕方ではあるが、極めて古い時代からの催淫薬としての角の用法が出現してくるのである。一角獣はキリスト教徒とその教会の統一を意味することもあれば、一方でキリスト教徒の敵、異教徒とユダヤ人を意味することもある。

5 キリシタン資料に見えるキリスト教的な色彩を帯びた一角獣

実は、このキリスト教的な色彩を帯びた一角獣の話が、寛文三年〔1663〕に將軍家綱に献上されたヨンストン『禽獸鳥魚図』よりも前に日本に伝わっていた。それは天正十九年〔1591〕に刊行されたキリシタン版『サントスの御作業の内抜書』（加津佐学林刊）の「バルランとサン・ジョサハツ」の中に現れる。聖ジョサハツが老人から聞いた話の中に現れる「人間をつかまえようとたえずつけ狙っている死」の表象としての一角獣である。

『サントスの御作業の内抜書』は日本語がロー文字表記されているものであるが、村岡典嗣編『吉利支丹文学抄』（改造社、1926.5刊）に漢字仮名交じり文に改めたものがあるので、それを次に掲げる。

或人、うにこうると言へる獸けだものに殺されんとして逃にげまげ様に、いかにも深き落し穴に陥りけるが、立木一本ありあひて、その中に落ちければ、手に当るに任せて

枝に取付き、僅かなるものを踏へて、宙にかかつて居たる也。このもとを見れば、黒白くろはくの鼠二匹ゐて、その木の根ぎはをかぶり細め、切に之をかぶりける。穴の底を見れば、大蛇口より火焰の息をつき出して待ちかけたり。悪龍は四匹、身をとりにからめてゐたる也。その危き所には蜂の蜜ありけるを見て、その差当る大難儀をば打忘れて、まづその蜜をねぶりに甘きと思ふ也。これ即ち、現世の栄花に執着深き者の譬也。うにこうるに追かけらる、と言ふは、人をおつかく時剋の事也。取付きたる木の枝とは、面々の命の事也。黒白の鼠とは一命の隙を亡す夜昼の事也。四匹の悪龍とは、人の身は地水火風を以てか、ゆる血気痰きたん黄水わうすいのこと、この四ツの加減損ねて死するといふ心也。深き穴の底にある大蛇とは、世界に執着する者どもを待ちかゝる火焰の淵なる、いんへるの事也。さしむかふ難儀を忘れさせたる甘き蜜とは、終りなき事を忘れさず、現世のあだなる栄花の事也。終りなき一命の悦びに至らん事を歎かずして、永き苦患くげんを受くべき事を忘れ、墓なきことに執心する者は、かの譬に異らず、と語り給ふ也。

この話のとはは仏典『寶頭盧為優陀延王說法經』にあり、それが西に伝わり、聖ジョン（St. John Damascene）の著とされる『パーラムとジョナファート』（Parlam and Josephat）の中で、第四の寓訓として利用されたことが明らかにされている（注⑦）。『サントスの御作業の内抜書』はそれを用いたものようである。内容はほぼ同じであるが、仏典で「大悪象」とあるのが「うにこうる」になっている（注⑧）。

蘭学者たちが蘭書によって一角獣の伝説を知る前に、日本のキリシタン信徒たちはこうした一角獣を知っていたのである。この話は人間存在を表した最も出来の良いい比喩の一つとして定評のあるものであるが、その後の禁教令やキリシタン弾圧によって日本では知られなくなつたものと思われる。ただし、同じキリシタン版『伊曾保物語』（ローマ字本・文禄二年〔1593〕天草学林刊）によって日本に始めて伝わったイソツプの話はそうした困難を克服して、庶民にまで知られるようになっていたので、単に禁教令やキリシタン弾圧というだけの理由ではなかつたようである。それについてはさらに後に考えたい。

6 天球儀の中の一角獣座

前述のように江戸時代の日本人が目にした西洋の一角獣の図像には、ヨンストンの『禽獸鳥魚図』に描かれているものと南懷仁の『坤輿図説』に描かれているもの

があったが、もうひとつ天球儀に描かれた一角獣座がある。

大航海時代以降に天の南極周辺の夜空には十二の新星座が設けられたが、それを契機に天の北半球でも、それまで星座の無かった星座の境目などに新星座が設定されるようになった。一角獣座もその一つである。ポーランドのヨハネス・ヘヴェリウス (Johannes Hevelius, 1611-1687) の星座図も一角獣座を描いている早いもの一つであるが(注⑨)、長崎平戸藩の藩主松浦静山が和蘭通詞を介して手に入れた、一七〇〇年にオランダ(オランダ)のアムステルダムで製造された天球儀(平戸藩楽蔵堂旧蔵、現長崎県平戸市松浦史料博物館蔵)に描かれている星座は、そのヘヴェリウスの星座図を忠実に模写したものである(注⑩)。一角獣の絵図の傍らには *monoceros* と書かれている。長崎奉行所に勤務した学者北島見信の『紅毛天地二図贅説』(元文一―三年 [1737-38] 頃成)の上巻はこの天球儀の星座の解説したものであるが、『*Monoceros* 摩老西路(転舌呼)ス』[*Scxtans* (西斯塔ス)』[*Urania* (烏刺你翁)』と『*Rodur* (羅布兒) - *carolinum* (仮羅力奴謨)』とを合わせて「右座内二像及下座外一像者、乃係乎新図之増益」と解説している。黄道以北星像計三十七の説明の中にも「右座内十二像及外一像者、当三吾元禄十三年庚辰、彼土之学士揺俺企斯係柳斯所三新增一之黄道以北星象名矣。故於二旧図一未三曾有二未見」とある。元禄十三年は西暦一七〇〇年であり、「揺俺企斯係柳斯」はヨハネス・ヘヴェリウスのことである。また、前掲の『紅毛訳問答』に見える「紅毛新刻の星象の図にモノセーロスの形状を図す云々」とあるのもこの天球儀のことと考えられる。さらにまた、木村兼葎堂の『一角纂考』に、

所謂一角獣者、亦是西洋之一説、而彼邦天文星象之図、亦載之炳如焉。

とあったが、兼葎堂と松浦静山とは交友関係があり、この「彼邦天文星象之図」も楽蔵堂蔵の天球儀である可能性が高いであろう。

星座になった一角獣もまた江戸時代に日本に入ってきていたのである。ただ、筆者が知り得た史料はすべて楽蔵堂蔵の天球儀に関わるものであり、それによると極めて限られた者だけに知られていないことになる。司馬江漢の「天球全図」(寛政八年 [1796] 成)は北島見信の『紅毛天地二図贅説』から半世紀後に描かれたものであるが、描かれている星座の中には一角獣座は見えない。司馬江漢は新しい星座図の存在を知らなかったか、知っていてもそれを描いた星座図を見る機会を得なかったものと思われる。

7 蘭学者たちの一角獣伝説に対する態度

さて、本稿で特に問題にしたいのは、一角獣伝説が村瀬之熙の『芸苑日涉』で南懐仁の『坤輿外紀』の記事を引用したのを最後に日本で語られなくなることであり、そしてそれは、大槻玄沢の『六物新志』また木村兼葎堂『一角纂考』の本草学的な研究の影響によると考えられることである。

大槻玄沢たちが陸獣一角の存在を認めなかったのは、多くの新しい西洋書ではその存在が否定されていることを知ったためであるが、なおその非存在説に従ったのは蘭学の持つ性格によるものと思われる。

蘭方医たちが問題としたのは舶来の妙薬の正体であった。一般に蘭学者たちはヨーロッパの技術や知識を貪欲に学んだが、精神や文化を学ぶことには積極的ではなかった。和魂洋才という考え方は新井白石以来のものであるが、蘭学の目指したものは実際の生活に資する知識を得ることであった。キリシタン宗関係の書籍を輸入する禁止令が出されたのは寛永七年 [1930] であり、それが緩和されたのは、享保五年 [1720]、八代将軍吉宗の時であった。「和蘭書と申すもの、是まで御覧遊ばれし事なきものなり。何なりとも一本指し出す候様上意ありしにより、其頃何に書なりしにや、図入りの本差し出せしに、御覧遊ばされ、これは図ばかりも至て精密のものなり、此内の所説を読み得るならば、亦必ず委しき要用のことあるべし」(『蘭学事始』)とある「図入りの本」はヨンストンの『禽獣鳥魚図』とドトネウスの『遠西本草譜』だとされているが、最初に『禽獣鳥魚図』を訳し始めた野呂元丈は第一巻を訳したところで、「此書薬物ノ為ニ作クル本草ニアラズ。故ニ功能ノコト一切ナシ」という理由で以降の巻の訳は止めている。蘭学は「要用のこと」を西洋の書籍に求めることから始まったのである。舶来の妙薬「一角」もまたその正体を明らかにすることが重要であり、その究明に意が注がれたのであった。その結果、蘭学においては確証のない陸獣一角の存在は妄誕の説として否定され、一角獣伝説もまた顧みられることはなかった。

これに関連して思い出されるのは、蘭学者たちが不可解に思い、解決できないでいたことの一つに、西洋人の描いた世界図が一つの大陸としてしか見えないヨーロッパとアジアとを二大州として区別していることがあった。中世ヨーロッパにおける世界はアフリカとアジアにヨーロッパの三つの世界であったが、この三つの世界は宗教と文化の違いに基づく世界像であった。新しい「五大州」の形を描いた世界図の説明も、そうした中世以来の考え方が継承されていたのである。そうした人文学的な問題は当時の蘭学者たちは興味の対象外にあったようであり、先の疑問を

解く知識を得る機会もなかったものと思われる。妙薬「一角」と一角獣伝説に対する関心の違いもこれと同様であったと言える。

おわりに

ヨーロッパにおける一角獣の表象について本稿が主に参考にしたのは、前掲のベア著『一角獣』であるが、この本の最初にはドイツの疾風怒濤期の作家シラー (Friedrich von Schiller 1759-1805) の言葉が掲げられている。

人生においてはすべてが繰り返されるだけだ

永遠に若さを保つのは幻想のみ。

いまだかつて、そしていずこにおいても生起したことのなかったもの

そのみが、決して老いることがない！

さらに序章の始めには、

おお、これこそ存在しない獣

というリルケ (Rainer Maria Rilke 1875-1926) の「オルフォイスに寄せるソネット」の一節が掲げられている。このソネットは、一五〇〇年頃に、パリあるいは北フランスからフランドルにかけての地域で織られた「一角獣を連れた貴婦人」と呼ばれる六枚の豪華なタペストリーを見て作ったものと言われる (現在フランス国立クリュニー中世美術館所蔵)。富士川英郎氏の訳 (『リルケ全集』第13巻、弥生書房) によって、その第二部第IV節を掲げる。

おお、これは現実には存在せぬ獣だ

ひとびとはこれを知ってはいなかったのに、確かにこれを

——その歩く様子や 姿態や 頸を

その静かな眼差しの光りに至るまで——愛していたのだ

なるほどこれは存在していなかった だが ひとびとがこれを愛したというこ
とから 生まれてきたのだ

一匹の純粋な獣が。ひとびとはいつも余地を残していた

するとその澄明な 取って置かれた空間の中へ

その獣は軽やかに頭をもたげ もうほとんど

存在する必要すらなかった ひとびとはそれを穀物ではなく

いつもただ存在の可能性で養っていた
そしてそれがこの獣に力を与え

その額から角が生えたのだ 一本の角が

そして彼はひとりの少女に白い姿で近より——

その銀の鏡と 彼女の中に存在していた

既に十七世紀には西洋においても陸獣一角の存在は否定されていた。しかし、ベアが言うように西洋においては「何千年もの間、人間の精神と心情はこの存在しない獣にかかわってきた。そして今なおこの獣は澁刺と現代文学を駆け抜けている」のであり、一角獣は「ヨーロッパ精神史上最も魅力的で多価値的な象徴の一つである」(グスタフ・ルネ・ホッケ) のである。

こうした現実には存在しないものに対して日本人が全く無関心だったわけではない。玄沢の『六物新志』は和蘭本草の諸書に記されている良薬の中から六つを取り上げたものであるが(「凡例」第十三則)、その中には人魚も取り上げられている。玄白はこの人魚の存在に対して否定的ではなかった。『六物新志』が書かれる以前にも井原西鶴(1632-1693)は『武道伝来記』(「命とらるる人魚の海」)にも人魚は登場し、『六物新志』以後も山東京伝(1761-1816)の『箱入娘面屋人魚』、滝沢馬琴(1767-1848)の『南総里見八犬伝』(1814-1841)などにも登場してくる。作り物語ばかりではない。西川如林の『増補華夷通商考』(1709)や司馬江漢の『西洋画談』(1799)および『和蘭通船』(1805)、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(1806)にも取り上げられており、松浦静山の『甲子夜話』(1821-1841)では伯父母や平戸の鉄砲足軽の実見話まで記されている(正編巻二十の二十六)(注⑩)。

一角獣もまた近松の『平家女獲鳥』(前掲)には登場していた。しかし、『六物新志』以降はこの存在を言うものではなく、文学作品にも現れない。この人魚と一角獣との違いはどのような理由によるのであろう。「人魚」と「一角獣」が持つ宗教的背景などの有無、あるいはこれらが表象するものの違いなども関係するのかもしれない。また、日本に知られた時期の違いも関わっているのかもしれない。中国の『山海経』や『兼名苑』に見られる「人魚」は早く源順の『和名類聚抄』(承平年間[931-937]成)に紹介され、その後も目撃談まで語られ続けてきたのに対し、中国の一角獣「獬豸」は寺島良安『和漢三才図会』(正徳二年[1722])などでようやく日本に知られるようになったものと思われ、西洋の一角獣は江戸時代にまったく始めて伝えられたものである。しかも西洋の一角獣の登場するキリシタン文献は禁教政

策によって世に広まることなく、その後、蘭書などによって伝えられた一角獣伝説も、蘭学者たちのその正体と薬効についての本草学的な探究成果によって妄誕の説として切り捨てられてしまった。こうした事情も両者の日本への定着の違いの原因となっているものと思われる。さらにはそうした悪条件を克服して一角獣伝説が庶民の中に広がっていかなかったのには、人魚は海に棲むものであり、一角獣は森に棲むものであったことも関係しているのではないかと思われる。海に囲まれた日本では海は身近な場所であり、不可解な生き物も棲息する可能性を思わせる場所である。しかし、日本の森(山ではなく)にはそのようなイメージはないであろう。そのような場所を想像できない日本においては一角獣のイメージを育てあげることが困難だったのかもしれない。いずれにせよ、かつては近松の作品に現われていたように、日本でも一角獣は西洋の文学の世界に今も生きる一角獣と同じ精神性を持つ可能性を有していたと思われる。それを継承発展させることのできなかったのは惜しまれる。

注① 荒川惣兵衛著『外来語辞典』(1967、角川書店刊)に「ウニコウル一本」『御日記』16236.18」とあるが、未詳。

注② 鮎沢信太郎『東洋思想史研究』(日本大学第三普通部発兌、昭和十五年七月)に次のようにある。

坤輿外紀は山村昌永の『増訳采覧異言』の引用書目にもあり、嘉永五年(一八五三)に篠田忠元の誌す序を附し、「東都城北清溪訳解」の坤輿外紀釈解二巻なる原文に解を併記した書が刊行されてゐる。此の他に秋岡武次郎氏は原文だけの翻刻文を所蔵せらるゝ由である。前にも記した如く此書の内容は珍奇なる地理的怪談が多いので人々の好奇に投じたものであらう。嘉永甲寅(安永元年、一八五四)浮世絵師柳川重信画く正海外諸島図説後集の終りに「長人、坤輿外紀、南懷仁」と題して、「長人」と智加国と名づく地すこぶる冷なり…(中略)とあり、明治に近づいてからも防間(ぼうま)に行われたやうである。(pp.132-134)

注③ ちなみに『坤輿外紀』に載せる「独角獣」の図はコントラート・ゲスナー(1516-65)の『動物誌』第一巻「胎生の四足動物物に(こゝろ)」(1551)から採られたものようである。

注④ 生きた「一角魚」が初めて日本にもたらされたのは天保七年(1836)のことである。『増訂武江年表』に「生魚にて持渡るは此度始めての由、ウニコール

は欧羅巴洲の内、スエーデンと云ふ海に産す、たとえは魚長さ二間なれば、角は長さ一間あり」と見える。

注⑤ この他に松岡玄達『用葉須知後編』(宝暦八年〔1758〕刻成)の「番葉類」にウニコールとあり、牧墨僊の『二宵話』(文化年間成)に「一角」があるようであるが、未確認。

注⑥ 寺島良安『和漢三才図会』(正徳二年〔1712〕)卷三十八「獸類」に、

〔図(略す)〕 麒麟

円蹄一角

〔図(略す)〕 獬豸(かいち) 解池 狗狴(広雅) 獬廌 鯨角虎

三才図絵云、東望山有「獬豸」。神獸也。能触邪。状如羊。一角四足。王者獄訟平則至。…(下略)…

とあり、栗原信充『柳庵隨筆』(文政三年刊)に、

一角 訓蒙図彙云、獬豸(一角なり) 玉海云、雍熙二年閏九月己亥坊州

獻「獸」、左右皆曰麟也云々、唐興平二十年三月有「一角獸」、識者為「

獬豸」、魚譜云、一角魚と云は東洋にあり頗上に角あり長三尺許、これ

は薬に用ふる一角なり。

注⑦ 伊藤正美訳『ゲスタ・ロマノールム』(篠崎書林、昭和六十三年十一月刊)の第六十八話「蜂蜜」の註、福島邦道『黄金伝説』と『サントスの御作

業』(川口久雄編『古典の受容と新生』明治書院、昭和五十九年十一月刊所載)、および板橋倫行「黑白二鼠譬諭譚」(『くらしつく』四・五、昭和十一年四月・十一月、『大仏造宮から仏足石歌まで』せりか書房1978所収)。この論文については寺川眞知夫氏のご厚意によって読むことができた。記して感謝の意を表します。

注⑧ ヤコブス・デ・ウオラギネス編『黄金伝説』(Legenda aurea)の「聖バルナムと聖ヨサバト」では次のようになってゐる。(前田敬作・山中知子訳『黄金伝説』人文書院1987年刊による)。

肉体の快樂におぼれ、たましいを餓死するがままにしている人たちは、一角獣に食われまいとしてあわてふためいて逃げだし、ふかい淵に落ちたある男のようなものでございます。男は、影をころげ落ちていく途中で一本の灌木を両手でつかみ、ぬるぬるした滑りやすい地肌のうえに足をのせました。ところが、宙ぶらりの姿勢のままあたりを見まわしますと、すぐ近くにねずみが二匹いるではありませんか。一匹は白い、もう

一匹は黒いねずみです。男がつかまっている灌木の根をせつせとかじつていて、根はいまにも切れそうです。下を見ますと、淵の底にはおそろしげな竜がいて、火をはきながら大きな顎をあげ、彼を呑みこもうと待ちかまえていました。彼が足をのせたぬるぬるところは、地肌とはとんでもない、かま首をもちあげている四匹の蛇でした。しかし、眼を上にあげますと、灌木の小枝から甘い蜜がしたたっていました。男は、危険にとり巻かれていたことも忘れ、その蜜を夢中になって吸いつづけました。ところで、一角獣と申しますのは、人間をつかまえようとたえずつけ狙っている死をあらわしています。淵は、あらゆるわざわいにみちたこの世界をあらわしております。灌木は、白ねずみと黒ねずみに、と申しますのは昼と夜の時間にたえまなくかじられ、食いへらされているわたしたち人間の生命のごとでございます。四匹の蛇がいる場所とは、四大元素からできておりますわたしたちの肉体のごとで、四大のバランスがくずれますと、たちまち死んでしまいます。おそろしげな竜は、いまにもわたしたちみんなを呑みこもうとしている地獄の口をあらわしています。小枝からしたたっている甘い蜜は、人をあざむく現世のかりそめの快楽の象徴です。人間は、蜜の甘さにまどわされ、自分をとり巻く危険をも忘れてしまうのでございます。

注⑨
現在ではケプラーの義理の息子ヤーコプ・パルチュが一六一三年に製作した天球儀に *Monoceros Unicornis* があることが明らかにされており、天文学者ヴィルヘルム・オルバースと年代学者ルートヴィヒ・イデラーは一五六四年以前に既にこの星座が使われていたと言い、さらに古典学者のヨセフ・スカレルゲルは古代ペルシャの天球儀に既に既に見られるとする研究を発表しているようである。

注⑩
このことを最初に指摘したのは今井湊「松浦天地球儀」(『蘭学資料研究会研究報告』第62号(1960.5.28))だと思われる。本稿の筆者は千葉市立郷土博物館&府中市郷土の森博物館刊『平成7年度特別展 星座の文化史 古星図と天球儀に描かれた星座たち』所載のヘヴェリウスの星座図と松浦史料博物館蔵天球儀の模型でそれを確認することができた。

注⑪
日本における「人魚」の受容については九頭見和夫『日本の「人魚」像』(和泉書院刊)に詳しい。

【付図】

本文で述べたように江戸時代の日本人が見た西洋の一角獣の図像は、①ヨンスト

ンの『禽獣鳥魚図』のもの、②南懐仁の『坤輿図説』のもの、③平戸藩楽蔵堂蔵の天球儀のもの三つだったと思われるが、③を渡辺教具製作所が原物を三分の二に複製したレプリカからの写真で示す(図1)。併せて中国の一角獣「獬豸」の姿を北海道立近代美術館編『シルクロードの煌めき——中国・美の至宝』から複写して掲げる(図2)。使用許可取得済。甘肅省酒泉市下河清から出土したもので、西晋時代(220-316)のものと思われる。甘肅省博物館蔵。銅製。



図1

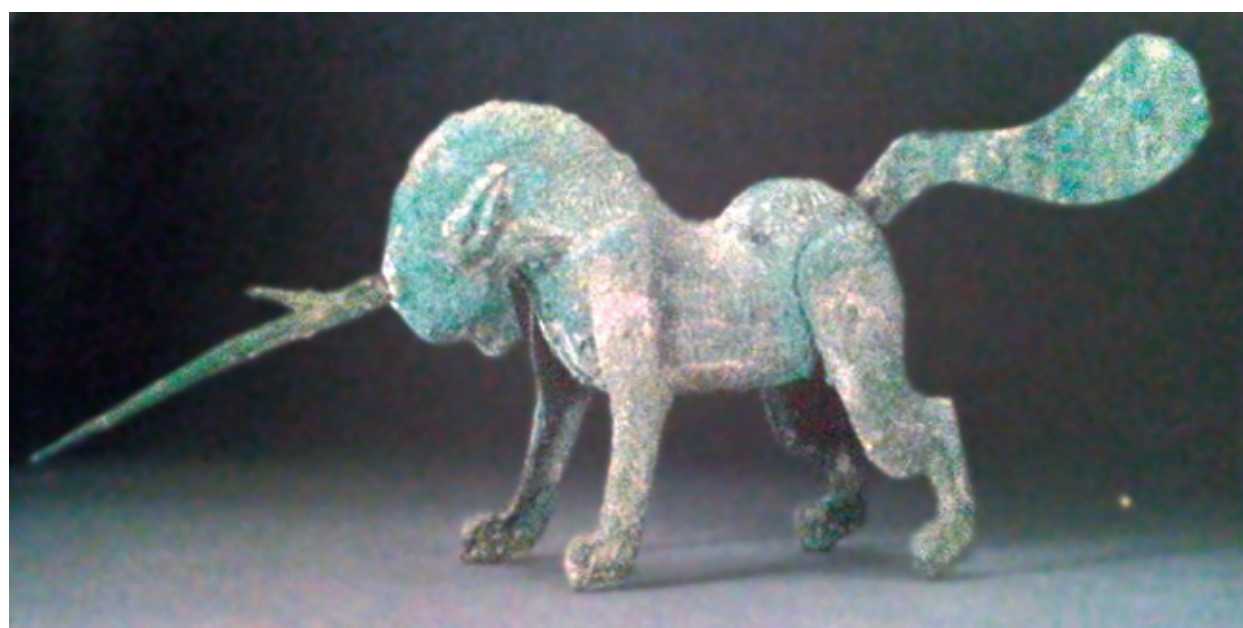


図2

